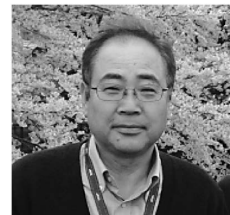


2019年度日本質量分析学会

**功 労 賞****岩淵晴男 氏** [日本電子株式会社 (技術顧問), 博士(工学)]

岩淵晴男氏は、1971年に三共株式会社に入社後、1975年から2015年3月まで、同社（現 第一三共株式会社）中央研究所、分析代謝研究所や薬物動態研究所等で一貫して質量分析を利用して創薬研究に関わってきた。同社における研究キャリアの初期においては、二重収束質量分析計などを用い、木下 武博士（2016年度功労賞受賞者）、中村健道博士（1993年度奨励賞受賞者）らとともに、種々の化合物の構造解明を行っている。その後、薬物の生体内運命を、安全性の面から代謝的な観点で質量分析法を駆使した研究を進めた。特に薬物投与後の動物・ヒトなどの血液、尿、組織から薬物およびその微量代謝物について、GC、LCなどの分離手段と組み合わせて得られたマススペクトルに基づいた構造解析を行っている。これらの研究により、さまざまな薬物の代謝経路を明らかにすることができ、厚生労働省への数多くの薬事申請に至っている。

これらの研究成果について、岩淵氏は本学会の質量分析総合討論会（旧 質量分析連合討論会）やBMSコンファレンス（旧 BMS談話会）、薬物動態学会で数多くの発表を行っている。そしてさまざまなシンポジウムにおける講演や座長を行うなど、学会活動へも貢献している。質量分析を用いた薬物代謝研究で得られた知見は、多くの学術論文にも発表するとともに書籍にもまとめられている。書籍の出版では、「現代質量分析学」（化学同人）、「生命科学のための最新マススペクトロメトリー」（講談社）、「実験医学 シングルセル生物学」（羊土社）を分担執筆したことに加え、「試料分析講座 創薬のための分析化学」（丸善出版）の編集にも携わっている。特に、創薬プロセスにおいて必須な薬物代謝経路の解明における質量分析の役割とその重要性については、中心的立場で執筆している。

近年では、故・升島 努博士（広島大，理研）がリーダーとして進めた「1生細胞分析」の研究プロジェクトに関わり、高感度な質量分析装置に1生細胞分析用のアタッチメントを装備して、1個の肝細胞由来の細胞質や液胞、核などから薬物や代謝物の超微量分析を行い、その成果をASMS conferenceなど学会で発表している。

このように、岩淵氏は、会員として30年以上にわたって、質量分析技術の進歩はもとより、創薬分野特に代謝物解析での質量分析の重要性を知らしめ、その普及に寄与しており、日本質量分析学会功労賞の受賞者としてふさわしいものとして、贈呈を決定した。